

佛教における戦争體驗 (二)

市川白弦

まえがき 前回序章は私の戦争體驗を抵抗・動搖・同調の過程としたが、これを佛教界内外の情勢・状況のなかで追跡しよう。このばあい抵抗(誇張的表现)の部類が、協力のそれよりも量的には多い。だが、この比率は、私の抵抗と協力との事実上の比率ではない。文筆活動は行爲の小部分にすぎないからだ。事實の記述を主眼とし、これの省察は終章にゆずる。全篇にわたる不備について御教示を仰ぎたい。それゆえこの章以下を未定稿とする。ここで取扱うのは、主として私のいわば outdoor の戦争體驗であり、それは必ずしも at home の經驗ではない。兩者の分裂・矛盾の度合は、通例、政治權力の重慶の度合に比例する。必要なことは、兩者を構造的・作用的連關においてとらえることである。その作業はのちにゆずられる。

一 (未定稿)

記述を、軍閥ファッションの行動開始期とみられる一九二八年(昭和三)から始める。⁽¹⁾この年は、急速に近づく世界恐慌を前に、世界の資本主義が體制建直し(1)の課題に直面したなかで(獨にヒトラー内閣が成立し、米にニュー)、日本では前年、田中兼攝外相のもとで「東方會議」が決定した「對支政策要綱」にそつて、中國大陸における「王道樂土」建設のプログラムが、整備されつつある時期であつた。

二月。普通選舉法による總選舉實施。「明るき日本への前途、けふ普選最初の投票日」とかかげた二〇日付「朝日新聞」は、内相鈴木喜三郎の聲明をのせている。曰く「民政黨は議會政治を徹底せしめんことを要望すと高唱しているが、これは極めて穩やかならざる思想でありわが國體と相容れない。主權は、天皇にありとする帝國憲法を蹂躪す

る、断じて許すべからざるものである。」この選挙戦に共產黨はか無産政黨初めて登場、政府の猛烈な選挙干渉にも拘らず、與黨政友は野黨民政を抜くこと僅かに二名、無産各黨四四七、八四六票を得た。三月十五日、全國にわたつて共產黨員檢舉、共產黨、勞農評議會、無産青年同盟の結社禁止。各大學の社會科學研究会に解散命令、東京帝大、大森義太郎、京都帝大、河上肇、九州帝大、向坂逸郎、石濱知行、佐々雄雄ら追放。四月第二次山東出兵。日本プロレタリア藝術同盟、前衛藝術家同盟合同して全日本無産者藝術聯盟(略稱ナップ、機關誌「戦旗」)結成。五月。日本宗教懇話會「惟神の大道のもとに、我國宗教界は、新文化の創造と世界の更生に貢獻すべき使命をもつ」という趣旨の聲明。六月。緊急勅令により治安維持法改悪、死刑を追加。七月、全國に特高警察設置。六月。張作霖爆死。陸軍省「南方便衣隊の仕業」と發表、爆殺の主謀者は、北京公使館附建川美次少將と連繋ある關東軍參謀河本大佐。⁽⁸⁾このため田中内閣總辭職(翌年)。神佛基による日本宗教平和會議「我が國體に背反する共產主義者等の結社及びその運動の絶滅を期す」を決議。十二月。河上肇檢舉。この年、伊フアシスト獨裁法案成立。ソ連第一次五カ年計畫發表。

M. Scheler : Die Stellung des Menschen im Kosmos. R. Hennig : Geopolitik. O. Spann : Gesellschaftsphilosophie.

Remarque : Im Westen Nichts Neues. Hemingway : A Farewell to Arms. 國譯一切經刊行着手。西田幾多郎停年。三木清「唯物史觀と現代の意識」。三木・羽仁五郎ら「新興科學の旗の下に」創刊。この年一月、朱徳、湖南に最初のソヴェト建設。

一九二九(昭四)。一月。岐阜縣犀川切落しに反對、農民三千五百暴動、知事軍隊出動要請。漢口の排日暴動化。三月。勞農黨代議士山本宣治右翼テロに仆る。同日、治安維持改悪法可決。四月。共產黨第二次檢舉首腦部全滅。東北地方中心に農業恐慌全國に擴大。東北の青年教師達「綴方教室」刊。九月。「様々なる意匠」(小林秀雄)十月。紐育株式大暴落、世界恐慌始まる。「利潤獨占産業の自滅の時」は近づき。混亂憂色ウォール街。此の迷信のエルサレム。殘存形態レヴァイアサン。機能活力萎えはてて、僅かに頼むフアシズム。死前の舞踏幾時ぞ。(小笠原秀)十一月。大山郁夫新勞農黨結成。十二月。神社制度調査會發足「神社非宗教」の路線始まる。この年、國民政府不平條約廢棄を宣言、日本政府拓務省開設。日本佛教學協會成立。

F. Tönnies : Demokratie u. Parlamentarismus. Heidegger : Vom Wesen des Grundes. Was ist Metaphysik? 河上肇「トニクス主義經濟學の基礎理論」刊。「第二貧乏物語」執筆。三木清「社會科學の豫備概念」。平林初之輔「政治的價值と藝術的價值」(文論)。小林多喜二「蟹工船」。徳永直「太陽のない街」。「プロレタリア科學」「少年戦旗」創刊。

山形高校に軍事教練反對のビラがまかれ、早大に雄辯大会擁護の學生大會がもたれ、右翼學生と亂闘。文部省社會教育局を設け、「思想國難」に對する「教化總動員」を開始、國民精神の作興、國體觀念の養成を強調、神宮競技を中心とする體育の全國的統制のため、體育局の設置を決定、宗教團體法案を設け、信教の統制開始。佛教界の一向を、大谷光瑞(Pōtō, 1878-1958)「大乘」誌を經營、滿州傳道(行い、シナ、南洋、トルコに事業を起す)に見よう。曰く、「大聖世尊の教を立つるや、慈悲忍辱を常道となすも、降魔折伏を權道に示せり。大般涅槃經には末世の正法護持は持戒によらず、刀劍器仗を用ゆべきを遺訓せり。武を得ずば文を全うするを得ず。今日憤々者流の漫に平和を口にし、武備を怠らんとするや、淫樂に耽溺せんと欲する思想の發現にして、我之に與せざるなり(略)」平和の毒は人是に罹るを知らず(略)大聖世尊は明らかに大般涅槃經に、之を訓戒せり(略)大薩尼乾子所說經は、王道の第一に武備を整うるを以てせり(略)家に牆壁なくば盜賊室に入る。國に武備なくば隣寇隙に乗ず。我帝國は現に平和に中毒せんとし、文弱に流る、特に都市の青年に甚し(6)。ジョン・フォスター・ダレスの「戸締り論」は、すでに大谷によつて、いや軍部とこれに同調する論客によつて、數年前からおこなわれていた。青年の「文弱」に對する軍部の攻撃は、青年、學校教師の長髮にまで及んだ(4)。

大谷論説と同じ月、私は田舎のサークル誌に「文弱」のペンネームで、「なまぐさき論理」をよせた(5)。對話體のもので、「將軍 戦争はよくないから軍備をやめろ」というのは、泥棒はいけないから戸締りをやめろというようなものじや。青年 いや、泥棒はいけないから、泥棒ゴッコをやめろというんです。」から始まり、青年の長髮に對する將軍の非難に答えて、青年「そういう論理は、丁度明治の開化頃に、蠻骨漢が閣下のようなザンギリ頭に對して、墮落書生ども、チヨンまげに返れ、と叫んだ筆法です」といい、人類を善玉・悪玉に分類して、「北緯五十度以北は鬼ガ島、五十度以南は神の國」と考へるのは物騒な論理だとして、反軍備・反戦争を主張した。これが岐阜縣特高警察の知るところとなり、京都太秦署に連絡、この年の暮れ二回特高の取調べをうけた。これだけで事なきをえたのは、多分その同人誌が矮小、拙文もまた矮小であり、少々威(おど)しを、というところであつたらう。

一九三〇(昭五)。一月。ロンドン海軍々縮會議。細田民樹、財界の暴露を主題に「眞理の春」を朝日新聞に連載。三木清「文藝と宗教とプロレタリア運動」において、將來プロレタリア藝術と同じく宗教も存続すると論じ、論争起る。三月。中國左翼作家連盟結成(7)。四月。ガンジー反英運動開始・入獄。東京市電及び鐘紡争議。九月。陸軍青

年將校「櫻會」⁽⁷⁾ 結成。十月。安岡正篤、金鷄學院創立。十一月。濱口首相狙撃。この年、全國失業者四〇萬、農村危機深刻化。昨年、東北の青年教師によつて結成された北方教育社は「北方教育」を創刊、「調べる綴方」「科學的綴方」を提唱、兒童の作品を通して、新しい人間形成に努めた。東京に新興教育研究所發足、「新興教育」により、マルクス主義教育學の研究を進めた。北一輝、大川周明ら天皇親政による社會變革と、戦争による海外進出を主張、權藤成卿、橘孝三郎ら家族主義的な自治社會建設をめざす農本主義を唱えた。右翼からの政黨攻撃が活潑となつた。大谷光瑞はいう、「現代に不快なるものあり、黨人は是れなり。政黨あるをのみ知りて、帝國を知らず(略)知らず何れの日かこの黨人を一掃する秋風の來るあらんや。」⁽⁸⁾伊勢神宮大麻布の問題について、本派本願寺に提出された、七月一日付勸學寮答申にいう、「神宮神部署の解釋に従えば、現今頒布せらるる大麻は、皇大神宮の神靈なりとの事に候えば、若し單に國祖の名字を記し、以て國體觀念の涵養に資するものなりとせば、眞宗に於ても拜受差支なきことと存じ候えども、從來の歴史と云い現在の事實と云い、大麻は祈禱の意味を含み居るものと認められ候間、無祈禱を標榜する眞宗信徒としては、拜受奉安せざるを可とすと存じ候。」

左翼陣營から轉向者が現われ始めた。今東光が戰旗派から天台宗に、宮島資夫が黑戰系から臨濟禪に入つたのもこの年である。拙論「マルクス主義對宗教論の埋没」⁽⁹⁾は、今氏の「マルクスシズムの立場」での佛教思想、オマルクススト・オ佛教者といった佛教マルクスシズムは成立しない、そして同氏の、宗教の現状は否定さるべきだ、しかし宗教の本質は否定されないという説は既成宗教墮落論であり、マルクスシズムとは無關係だ、と述べた。拙論「マルクス主義と禪」⁽¹⁰⁾は、諸家のマルクスシズム觀を分類批評し、「劍禪一如といった標語によつて、殺戮と戦争を肯定してきた禪者が階級闘争を嫌惡して「善導」に狂奔するのは自家撞着である」と結んだ。大谷光瑞はいう「平等とはその質と量と形とを同一ならしむるの謂にあらず(略)大は大の特徴あり、小は小の特徴あり、國土山川亦然り。山に高低あり海に深淺あり、高きを削りて深きを填めば、恐らくは地球は數十メートルの水を以て覆わるるならん。」⁽¹¹⁾社會主義思想への佛教界の認識・見解の水準を示す。

Rosenberg : Der Mythos des 20. Jahrhunderts. Mannheim : Ideologie u. Utopie. 郭沫若「中國古代社會研究」。西晋一郎「實踐哲學概論」。紀平正美「日本精神」。西田幾多郎「一般者の自覺的體系」。

一九三二(昭六)。一月。日蓮宗井上日召、血盟團を組織。三月。軍部クーデター「三月事件」發覺。四月。橘孝

三郎「愛郷塾」結成。日蓮宗妹尾義郎を中心に新興佛教青年同盟結成。林靈法、壬生照順、中濃教篤らこれに加わり、佛國土の實現、佛教の革新、資本主義體制の改革を期す、という三綱領を決定した。川内唯彦ら反宗教闘争同盟準備會結成(九月、日本戰團的無)。六月。内田良平ら大日本生産黨結成。建國會による全國宗教擁護同盟結成、「國體に背かざる一切の宗教擁護」を声明。七月。萬寶山事件。文部省、學生思想問題調査委員會設置。全國勞農大衆黨結成。田中智學「日本國體の神髓」戰團的教學を力説。このころ友松圓諦、佛教法制經濟研究所を、今東光、佛教青年連盟を設立、資本制批判、封建佛教刷新を期した。八月。國民精神文化研究所設置。基督教學生の夏季學校、搾取なき共同社會を實現する社會的基督教への期待を宣言。九月。日本戰團的無神論者同盟結成(秋田雨雀、川内唯彦、眞溪蒼空朗ら)。スローガン「帝國主義戦争反對、反宗教闘争を階級闘争の一翼とせよ、など。

九月。滿州事變—關東軍の陰謀による侵略行動であつたが、視點をかえるならば、内には經濟恐慌を契機とする大衆の廣汎な起ち上り、外には中國の民族獨立運動、わけてもその中核をなす革命勢力の擴大におびやかされた、その意味において、受動的、性格のものであつた。勞農大衆黨は「帝國主義戦争反對」、社會民衆黨は「滿蒙の權益を民衆

へ」と主張した。十月、大谷光瑞「支那事變と國民の覺悟」を刊行、翌月三〇版を重ねた。軟弱外交を壓倒した軍部の果斷を稱賛し、我々佛教徒は、涅槃經に示された佛陀の遺訓に従つて、正義の爲に戦うべきだと云い、米國を恐れて逡巡するは、「棺柩中より頭を出せる」老朽瀕死の輩なりとし、我々が特に忠告したいのは、滿蒙偏重に陥ることなく、權益擁護の行動は支那全土に及ぶべきだ、と論じた。同月、櫻會によるクーデター「十月事件」挫折。第四回全國佛教大會、關東軍本庄司令官あて、事變中の皇軍慰問激勵の決議を打電。田中舍身の大乗會、反宗教運動折伏連盟結成。十一月。高津正道、日本反宗教同盟結成(宗教の反動云わず)。日本プロレタリア文化連盟(略稱)成立。北一輝「日本旭玄社」創立。十二月。「戦旗」「ナップ」廢刊、「プロレタリア文學」創刊。佛教界の大勢は、すでにミリタリズムに歩調を合せつあつたが、滿州事變直前の拙論「大乗道の歪曲」はこう書いた、「現實の中に菩提を成じ、娑婆に即して淨土を建立する、之が大乗の現世主義である。併し現實といひ現世といひ、甚だ多義曖昧である。そこで、斯る現實道が娑婆即寂光土とか、其の他かような概念によつて教義化せられるや(略)人は一方、大乗の現實觀における「現實」を、その特殊な體驗的基盤から游離させて、外部的存在として理解すると共に、他方、かかる現實概念

のもとに、生動しつつある歴史的現實を固定化する(略)かくて、大乘の現實道は、今や固定化された現實、觀念化された廬山・浙江を起點として、往き還りする觀照の循環に終る。従つてそれは、意識的にか無意識的にか、直接にか間接にか、極端な現状肯定主義、即ち反動主義の一形態として、否、反動主義の先驅として現れる。」

宗教研究會の機關誌「宗教研究」は、十一月特集「現代佛教の研究」を發刊。編集後記(石津)は「佛教が、思想的社會的に時代に即して考究考察せられることが要求されている。この氣運を察知して」と述べているが、この企圖にそうしたもの、姉崎正治「佛教の社會觀と社會案」、友松圓諦「現代フランス佛教界の一形勢」の二篇である。姉崎は、佛教の社會觀が、社會生活の責任と結果とを衆生自身に歸する點において、近代思想に通ずること、我々は今日の生活のなかで、個人のみならず法界の生活において、佛界を體現すべきであること、現代の社會病は、經濟偏重主義、政治と産業の野合、文教への政治の干渉、即ち「宗教が政治に玩弄せられ、教育學問が政治と産業の奴隸」と化していることであるとし、今日必要なのは宗教の社會化ではなく、「社會の宗教的照明」であると結んでいる。上記大谷の主張に比べて印象的である。

M. Scheier : Die Idee des Friedens. Jaspers : Die geistige

Situation der Zeit. P. Tillich : Protestantische Prinzip u. proletarische Situation. J.S. Barnes : Fascism. Pearl Buck : The Good Earth.

一九三二(昭七)。一月。上海事變。安岡正篤ら國維會結成。二月。前藏相井上準之助、血盟團員に射殺。大川周明ら神武會結成。三月。三井合名理事團琢磨血盟團員に射殺。滿州國政府樹立。日蓮宗酒井管長の教旨にいう、「滿州國の建設を見たる今日、宗門率先して教線を擴大し、永遠の平和境を彼地に實現し云々」。四月。田中智學の國柱會、會員石原莞爾に滿州事變における功勞を謝して、「蒙古退治の曼荼羅」を贈る。五月。五・一五事件。青年將校、大川周明、頭山滿、橘孝三郎らの支援のもとに決行、犬養首相暗殺。「十月事件は政黨政治に瀕死の重傷を與え、五・一五事件はこれに止めを刺した。」(大川)これ以後敗戦まで、政黨内閣は實現しなかつた。六月。ナチス第一黨となる。日本共產黨「三二テーゼ」(天皇制及び帝國主義戰爭との闘争強調)を決定。七月。赤松克麿、平野力三らの日本社會黨「一君萬民の國民精神に基づき、搾取なき新日本の建設を期す。」(綱領)八月。「米よこせ」運動各地に起る。九月。滿州國承認。十月。大日本國防婦人會結成。唯物論研究會創立(戸坂潤、岡邦、雄三、枝博音ら)。共產黨幹部岩田義道檢舉、數日後虐殺。日本山妙法寺藤井日達ら滿州國に布教開始。この

年、各工場に産業報國會結成。

佛敎界に戦争支持が急速に高まつた。「大悲の故に振う

折伏の劍」(赤井 義勇)はいう、「佛敎の慈悲の垂手には、折伏

と攝取の二法門がある(略)慈悲攝受の法門で化益の及ば

ざるものは、折伏降魔の劍を振つて、之を濟度し玉うもの

である(略)當然守るべき權益を護り得ざるは、軟弱外交

の罪といふべく、其の虚に乗ぜられて、凡ゆる排日毎日を

蒙つたことは、眞に遺憾である。」禪界の動向を「大乘禪」

九月號に見よう、「山は山、水是水、これが透れば一瀉

千里じや(略)天是天、地是地、男是男、女是女、僧是僧、

俗是俗、明惠上人の所謂有るべきようじや。是れが本當に

手に入れば、禪の能事足れりじや(略)天下國家の亂れる

は、我らの此の公案の宣傳が足らざるに因するじや。」(飯 田)

隱「日本は國民個人を單位とせずして、國家を單位とする

國柄であるから、無我相の國柄である(略)百姓には百姓

の本分がある(略)その本分は無我相である(略)世界を

我が身體として処分すべきである。世界の平和を害する腫

物は、切開すべきである。滿州國を認むるのは當然である

(略)無我相の修養をなさしむるは教育の根本でなくては

ならぬ。この無我相の敎を説きたるは金剛般若經である。」

(濱地天 松居士)「腹の力なるものが大聖者じや(略)廟行鎮の三勇

腹の力を養い、これを一切衆生に及ぼす工夫を爲さねばな

らぬ。」(陸軍中將堀 内信水居士)「一般に覺證以前の世界觀が時代錯誤

であるならば、覺證以後の世界觀も亦時代錯誤である。一

相無相の體験は學問研究ではないからである。かかる時代

錯誤の世界觀が、宗教的體験の與うる確信力と結合して、

大膽に實踐に移されるならば、民衆は甚だ不幸である。」

(拙 論)同誌十月號に一禪者が戦争を肯定して我々は生きて

いる限り殺生せざるを得ない、生存に關し相容れぬ狀況に

逢着した場合には、成佛の期の早いものを殺し、遅いもの

を生かす、これが佛の理法であり、この理法に合致する限

り、どれほど殺生するもよろしく、これに三歸戒を授けれ

ばよい、一國と他國とが利害相反する場合も同様である、

と論じたことについて、拙文「宗教的殺生の論理」は、こ

れは成佛という言葉の亂用であり、成佛の遲速を鑑別する

客觀的な尺度は存在しない、これは一種の「宗教的」ファ

シズムである。十重禁戒には、「一念執すれば山河も酒な

り、草木も酒なり」とあるが、今日は、宗教そのものが「酒

になろうとしている、と論評した。

西田「無の自覺的限定」。高橋「全體の立場」

一九三三(昭八)。一月。ヒトラー獨裁權を握る。戰闘的

無神論者同盟、國家神道の排撃、反戰闘争の強化を緊急の

任務とした。新興佛青、ファッシュ打倒等のスローガン決

定。大塚金之助、河上肇檢舉・入獄。共産黨第三次檢舉始まる。二月。長野縣左翼教員檢舉。作家小林多喜二檢舉、拷問六時間にして惨死。曹洞宗兩管長名を以て「滿州建國ノ雄圖ヲ扶ケテ、治化ノ要道ヲ行ワシムルハ、我帝國ノ責務ニシテ、眞ニ東洋平和ノ楔子タリ。我宗夙ニ正傳ノ佛法ヲ體シ、兩祖ノ訓ニ遵イ、當ニ皇祖ノ長久ヲ祈リ、國運ノ進展ヲ圖ル(略)誰カ不惜身命ノ大願ヲ發シ、修證不二ノ妙旨ヲ演ベ、以テ啓沃指導ノ重任ニ当ルコトニ努メザラメヤ」の教諭を發す。三月。國際連盟脱退。新興佛青、全日本佛教青年大會に全佛青の指導原理確立、軍國主義反對、資本制改造、ナチスの反文化主義反對等を提案して否決され全日佛青を脱退。四月。司法省思想檢事制。平野力三ら皇道會結成。荻田胸喜(慶大教授)、三井甲之ら牧野英一、美濃部達吉、末廣嚴太郎、瀧川幸辰らを赤化教授として文部省に處分要求。京大瀧川事件、佐々木惣一、末川博、恒藤恭ら文相と正面衝突、學園を去り、學園から自由の燈は消えた。五月。ナチス「非ドイツ著書」焼却。在郷軍人を基盤とする田中國重の明倫會結成。六月。文部省思想局設置。

佐野學、鍋山貞親「共同被告同志に告ぐる書」にいう、「…君主制廢止のスローガンを掲げたのは、根本的な誤謬であつた(略)皇室の連綿たる歴史的存在は、日本民族の過去に於ける獨立不羈の順當的發展、世界に類例少きそれ

を事物的に表現するものであつて、皇室を民族的統一の中心と感ずる社會的感情が、勤勞者大衆の胸底にある。我々はこの事實を、有りの儘に把握する必要がある(略)我々が戦争に参加すると反對するとは、其戦争が進歩的たる否とによつて決定される。支那國民黨軍閥に對する戦争は、客觀的には、進歩的意義を持つてゐる。また現在の國際情勢の下において、米國と戦う場合、それは相互の帝國主義戦争から、日本側の國民解放戦争に急速に轉化し得る。」この轉向の論理は、滿州事變に戦争支持を表明した

社會民主主義の論理と共通する點において(「改造」六月號の動機を滿州事變において)、對米戦争を支持する點において、中國の反植民大衆闘争および中國共産黨との戦いを隱蔽して、戦争の進歩性を主張する點において、戦争から革命への公式を、但し自分の意思に反して、とりいれ、革新勢力に媚びている點において、事實主義の論理において、京都學派乃至日本佛敎の事實主義につながる點において(佐野はのちに「佛敎界に接觸し、自分は起信論をよん、轉向へのレールをしいたものといえよう。續いて三田村四郎、高橋貞樹、風間丈吉、田中清玄(臨濟禪の居士)ら轉向。翌月までに轉向及び脱落者、未決一三七〇名中四一五名、既決三九三名中一二三名(司法省査調)。

七月。右翼クーデター神兵隊事件發覺。ナチス焚書、京大瀧川事件に抗議して學藝自由同盟成立。(徳田秋聲、三木清、中島健藏、谷川徹三、廣津和郎、大佛次郎、菊池寛、長谷川如是閑ら)。八月。極東平和友の會結成(加藤勘十、江口漢、水野廣徳ら)。信濃毎日主筆桐生悠々「關東防空演習を嗤う」、帝都上空に敵機を迎え撃つのは既に敗北だと論じ、憲兵隊の圧力により退社。十二月。松岡洋右、政黨解消を唱え政友会脱黨、日比谷公會堂において「日本民族は佛教にかぶれて、日本精神を見失つた、須らく神ながらの道に歸るべきだ」と演説。倉田百三「政治の宗教的基礎」を論じ「全人の價値の發展のためには、敢て犠牲をも作らねばならぬ。愛と正義を實現するための地盤としての、生命の物質的基礎には、辯證法的に犠牲を必要とする」と説き、「生命の宗教的理解」の立場から、滿州事變を支持した。日本勞働總同盟分裂。この年以降、中國人民に對する日本政府の阿片政策強化。シェストフの「悲劇の哲學」の輸入と前後して、三木清らによる「不安の哲學」流行、「不安の文學」「主體的リアリズム」と共に、文學に虚無的實存的傾向發見。椎名麟三、埴谷雄高轉向。友松、高神らの佛典講義を契機に佛教復興の萌し。哲學者ハイデッガー次第にナチスに協力。マルチン・ニーメラー「牧師緊急同盟」を組織、ナチスの基督教彈壓に抵抗。

M. Scheier : Vom Ewigen im Menschen. A. Malraux : La condition humaine. J. Strachey : The Menace of Fascism. 津田左右吉「上代日本の社會及思想」。西田「哲學の根本問題」。谷崎「春琴抄」。石坂「若い人」。

「昭和八年佛教界大觀」(中央佛教)にいう、「國家非常時に於ける佛教各宗派は、昭和八年に於ても時局對策の一方策として、國民精神作興に關する布教傳道に大いに力を盡し、特に四月、我が帝國の國際連盟離脱に關する詔書渙發せらるるや、各宗派管長は所屬寺院に對し、夫々諭達を發して、詔書御趣旨の宣布徹底に努め、國民精神作興に關する詔書渙發十周年(略)滿州事變二周年記念日に當つては(略)十一月、佛連第廿四回評議員會に於て(略)來るべき一九三六年(この年から戰時體制)に入ると政府豫告)前後の國家重大危機對策と、政府の思想國策樹立對應方策に關する決議をなし、思想國策問題に就て、政府に建白書を提出せんことを決定せし如きは、洵に機宜を得たることだ。」同誌同號の拙文「軍部・政黨・財閥」は、五・一五事件公判に關連して、次の様にのべた。

「古賀中尉は我々が自首しなかつたのは、我々が蹶起した動機を、天下公衆に傳えんがためで、割腹しなかつた理由がお判りであろう、と語つた。果して彼等の一言一句は、現代の凡ゆる報道機關を通じて、徹底的に宣傳せられた。

この宣傳において、被告らは、凡そ使用し得られる最大の侮蔑と憎惡の毒舌を以て、政黨、財閥、特權階級を反覆執拗にこき下した。例えば、貴族院議員はセキセイインコであり、警察は資本家の番犬、特權階級はお茶坊主と暫間とを一緒にしたものであり、國民はロンドン條約の責任者を呪い殺す權利をもつ、といった調子である。かかるいみじき怒號と罵倒とが、おおよけの法廷において默許せられ、かつ大々的に公表せられ得たのは、全く軍部を背景にしたればこそである。

この公判の宣傳効果は、幾十萬の減刑嘆願書によつて、統計的に實證せられた許りでなく(略)この公判は軍縮會議を前にして、世界に向つて、法廷を通じて行われた、軍部のデモンストレーションでもあつた。この示威は浪花節的愛國センチメンタリズムに貫ぬかれたものであり、辯護人達は前後三回に亘つて、小學校兒童の手紙を法廷において朗讀し、その都度滿廷を感涙に咽ばしめ、なかには聲を立てて泣く者すらあつた、と新聞は報じている。子供達は云う、僕は子供ですが、愛國心は大人にまけません。われわれ國民は、山本檢察官の求刑をじつとして承服できましようか。どうか軽い刑にして下さい」と。拙文は續いて、財閥は政黨に見切りをつけて軍部との結託を圖つていることをのべ、「近年の政黨は、その政治倫理の社會的・經濟

的地盤を失つてしまつた。ここに政黨政治墮落の根本原因がある(略)歴史的必然によつて、今日の政黨は、自己のもつべき倫理とプライドとの社會的・經濟的地盤を喪失した。而してこの地盤をもたぬ限り、政黨政治は今後信用を恢復する可能性はまずあり得ない。」

神道革新會(代表者宮井鑑次郎)、本派本願寺大谷光照宛、十二月三十日付内容證明郵便を以て「詰問書」を送つた。その第七項はいう

「貴教派にては、今後三千五百人の布教師を養成せられて、日本精神を打ち込み云々と云われて居るが、貴教派で養成せらるる日本精神とは、貴教派が現在主張し實行せられて居る、御大禮に對しても日本の國體、國式を以て奉祝せず、また全國民と共に萬歳を三唱せず、神宮大廟は佛前に供える佛飯の如きものである、と冷笑して拜受せず、我が皇室より國家國民が尊崇して居る天祖、國祖を祭祀せず、所謂善男善女より集めたる數百千金を投じて、宏大なる寺院を建設し、これに亡國印度のクロンボを安置して、三拜九拜しつある貴教派の爲しつある行爲が、即ち日本古來の民族精神を、佛教がその血となり肉となつて培養した表現の行爲である故に、この行爲こそ今日の國體の精華たる日本精神であるとして、布教師の頭に打ち込まれ候御者に候や。」

一九三三(昭九)。一月。京都驛、應召兵歡送の群集殺到し七十六名壓死。神道革新會の詰問書に端を發した「第二の廢佛棄釋」問題は、佛教に對する軍部・右翼の壓迫・要請、宗教團體法による信教統制と相まつて、起伏しながら敗戦の時まで繼續し、佛教の動向を規定した。顯眞學苑教授玉置韜晃は「眞宗各派に渦巻く大麻受否の問題」について、その経過と問題點をあげ、斷定をさけながら、こうのべている、「本派の某學者の著『現在の神社問題』には、次のような標目で從來の眞宗教徒の立場を示されている。

『神社は國の經營なり、國は宗教を直營するを得ず、故に神社は宗教に亘るを得ず。國若し宗教を直營せば、他宗教の壓迫となる、宗教壓迫は憲法の蹂躪なればなり。神社は國民一般の崇敬對象たるを要す。宗教は味を帶ぶれば崇敬の普遍性を失う。故に神社の尊嚴は非宗教たるを要す。神社の宗教令排除は制度上當面の要件なり。』と。恐らくこの標目は、眞宗教徒の神社觀を代表するものだろう。かかる論理から、當面の大麻受不の事件が、重大な問題を惹起することは自然だろう(略)眞宗十派の協議會に於て、大麻の受不は隨意たるべし、と決議したということであるが、果して單なるこの宗教家達の意見で、眞宗の教權たる祈禱問題が、解消されるであろうか。」椎尾辨匡「日本思想へ獻ぐる佛教」は、この標題の論證が多數の事例をあげてなき

れており、高楠順次郎「二千五百年の一轉機」と共に「第二の廢佛」に對する辯明である。高楠は日本建國の理念と合致せぬ基督教、社會主義、共產主義はこれを清算すべきであり、佛教を耶蘇教と同視して排撃するのは「連盟脱退の日本には相應わしからざる思想」だといふ。この破邪顯正の論理によれば、「皇祖皇宗の大人格に現れた建國の理想を忘れないで、血統團體としての血肉の使命と、文化團體としての智慧の使命とを二つながら全うするのが日本精神である。」里見岸雄「日本精神と佛教」は、「宗教は國家以上で」などと頑張っていると、そういう宗教は亡びてしまふ(略)阿彌陀如來を歸依の對象として、之に全色心を獻げる宗教的實踐と天皇中心の國體的情操とが、眞宗なり淨土宗なりによつて如何に取扱われるかは(略)佛教と日本精神との關係における最大の問題(略)權田雷斧翁が眞言曼荼羅の中に基督を合祀するといふので(略)この點日蓮上人の曼荼羅は各宗への大きな暗示であるが、これもなお不徹底であり(この「不徹底」は後年神宮冒濫として問題化した)本門戒壇論と國體論とを、更に洗練する必要がある、佛教の「新しい解釋學が勃興せねばならぬ。この新しい解釋學こそ、來らんとする佛教の受難時代を救う唯一のものだ」と警告する。

「中央佛教」三月特集「日本精神と佛教」は、各界併せて四十五名「第二の廢佛棄釋」への發言である。鈴木大拙、

今東光、中野松堂、市川のほかは諸説ほぼ同傾向である。

すなわち(1)大乘佛敎は水の如く自性なく、環境の方圓に隨う(2)日本佛敎は完全に日本化し、國體・國情に適合し、神

ながらの道と一體化している。(3)皇道は夫、佛敎は妻(窪川立花俊道、鈴木法琛、太田)。日本精神は種子、佛敎は肥料(覺眠、谷口乘禪、大塚英雄)。

日本精神の眞髓はマコト、之を培養したも(高井觀海、吉田無染)。

のは無我の精神(渡邊小洋)。寺院の二大使命は大法宣揚と鎮護國家、この二は即一、神佛分離は誤り、皇道は即ち無我の大道(伊藤康安)。日本精神の結晶は教育勅語、これの眞髓は皇運

扶翼、皇運扶翼の精神は恩の原理、之が發して忠孝となる

(増永靈鳳、今成覺禪)。四弘誓願も恩に歸する(窪川、杉)。社會は有機體、その單位は家、家のモラルは恩・祖先崇拜・忠孝一本、その最高表現が日本國體(増永)。王法佛法一如、眞俗二

諦により日本を完全にした(多田鼎、壺井聖光)。(4)十七條憲法は神儒佛を合一した不滅の大典(谷本實、藤本智董)、日本精神は君道と臣道から成る。君道は神道によつて、臣道は儒佛によつて

育成(井上右近)。聖德太子は三敎調和を圖つたが、中心は皇道(高島米峰)。

(5)日本精神を體認する道は、佛敎による大死一番

(山下成二)。日本佛敎の阿彌陀佛は皇國日本、眞如は有るが儘

の事實界、即ち世界に自立する日本國體(田代二見)。三昧心が發して忠孝となる、この佛敎精神が缺けると赤化思想となる(壺井)。日本精神の中核は太子の「和」、之を實現するものは臣道、上下のモラルとしての忠孝、上下のモラルを蹂躪するデモクラシーとマルクシズムを排除せよ(上)。儒の革命

思想、基の唯一神信仰は國體に反する(鈴木法琛)。基督敎的西歐文明の没落を救うものは大乘佛敎と結合した八紘一宇の精神(窪川)。眞宗の大麻不受、基督敎の祖先不拜は許されぬ(今成)。日本を侵略主義とみる諸國の誤解をとくために、

大乘佛敎の自利利他・共存共榮の精神を擧揚する必要あり、滿州國はこの精神から、神佛一體の原理において樹立された(太田、杉谷、石川成章)。日本精神Ⅱ 惟神の大道Ⅱ 宇宙の本體Ⅱ 本地の風光。日本民族は世界の選民、世界を統御する使命をもつ。殺人刀即活人劍、反戰論は擔板漢的愚論。立憲政治は尙早、十年間ファッショ政治を行え。大乘精神Ⅱ 大解脱道Ⅱ 日本人になること。聖犬ハチ公に學べ。教育は淺薄な世界人を作る。教育を正せ。國民皆禪即惟神の大道を悟ること、即ち大乘禪(原田祖岳)。(6)神社が宗教か否かは、個人の心がまえ如何にあり、宗教的行事を行うか否かによらず。

宗教的行事を行わずとも、崇敬心が高まれば宗教的となる。神社信仰は、これを佛教信仰と秩序立てて位置づけるならば、兩者は調和する。この點、基督教には不可能(宇野 國空)。

「私には何を日本精神と云うのかわからぬ(略) 日本精神と佛教との關係など、どう見るものかわからぬが、禪といふものは、そういうことには何も關係ないと思う。禪は日本精神の中へも、支那精神の中へも、又印度精神の中へも這入り得るものと思う(略) 日本精神は道德的なものに相違なからう。けれども宗教は、そういう方向には拘束されない別な境界にあるのであるから、日本精神とは關係はないのである。神ながらの道という、それはどういふことを意味するのか知らぬが、又世紀の發作として、排外的なことをやるのも、一種の興奮劑としてよいかも知れぬが、尊王攘夷といふことも、しまいには尊王はあつても攘夷はなくなつた。それらのことを考へて、廢佛毀釋といふことも、よく落ち着いて考へて貰わねばならぬ。」(鈴木 大拙)

「日本精神運動は：單に反動期の現象に過ぎない。一般にこれ等の運動には理論がない：そういう運動を冷靜に批判する臣民も亦、忠良な臣民であることを忘れてはならぬ：このような風潮に對して、阿諛迎合した本願寺派の態度は、およそ醜陋なものであつた：妹尾義郎君達の新興佛青同盟を排斥したり、日本精神に急角度に迎合したり、これ

では朝に源氏の君を迎えて、夕に平家の君を送る態度ではないか：日本民族は：天皇陛下をはじめ奉り、神佛基同等々と共に：根幹を一にする信仰共同體である：一旦緩急あれば、萬民ひとしく祖國のために死に赴く運命共同體である：僕一個人は大聖釋尊を崇敬すると同時に、インドの解放を心願するものである。」(今東 光) 今氏は別の所で、日支戰爭を難じて、今日横行する日本主義は「假面をつけた挑戰的日本主義」であり、「日本精神の高調が戰爭を助成するのでは、禍い之に過ぎたるはない」とし、大谷光瑞とは逆に、日本外交こそ危機日本の指導權を握るべきだといひ、佛教が「滑稽な思想善導の太鼓を叩いたり、軍部の尻馬に乗つて、挑戰的精神を高調しないで、日本外交の行方を見守り、日本外交のために今少し氣の利いた、御用振り」を發揮したらどうか」と述べている。

「吾人も左傾思想には反對であるが、今日の資本家とか特權階級とかが横暴であり、貧しきものの爲めに萬斛の涙を注ぐといふ點：からだけ考へてみれば、資本家や特權階級の塵を拂つて私腹を肥やさんとする輩より、餘程男らしく、そこに一脈の日本精神あることを認めさせられる：左傾のうちにも日本精神はあり、右傾のうちにも眞の日本精神にあらざるものがある。眞の日本精神とは、眞實の正道を辿るものでなければならぬ。」眞の日本精神は日本人の心

の純化されたもので、普遍性をもつのであり、そうでなければ排他侵略的となる。この普遍性は佛敎によつて磨きだされる。眞の日本精神の根柢には、佛敎精神があるはずだ。

(中野松堂)

拙文「日本精神現象學序説」は、對話體の、次の趣旨のものである。所謂日本精神は滿州事變の副産物、五・一五事件の餘震、一九三六年(この年から戰時態勢に入る、と林内閣豫告的聲明)の身支度。日本精神にも多種あり、葉隠論語は赤穂義士を排斥しており、紀平、里見、松永の日本精神はヘーゲル張り、松岡、中野のファシズムはバタ臭く、日本精神の名において西歐の帝國主義を密輸入している。源氏物語のように、上演禁止されては、日本精神も臺無しだから、官許、日本精神の時節、ただし外來思想排撃もよいが、それでは朝鮮、臺灣の施政に困るだろう。日本精神の問題は、「國內的には最近における統制經濟の問題、財閥、政黨と封建的ファッショとの對立の事情、國際的にはブロック經濟を強化せんとする列國帝國主義の拮抗と激化、および南支、ソ連邦の動向、これらの客觀的情勢との、生々しい連關において把握、批判されねばならぬ」とし、その一例に「政界の惑星」久原房之助の「皇道經濟論」を批判。その「國家改造綱領」の原理篇において、久原は三種の神器をとりあげ、鏡は經濟、玉は政治、劍は軍部を表徴する。經濟と政治と國防と

の三位一體制、これが新興日本經綸の柱石でなくてはならぬ、という。久原の三位一體とは何か。神體は久原自身。かれは久原財閥の盟主にして政黨の領袖、そして「日産」、軍需インフレのため井上デフレ時代に十五圓のものが、二百五十圓に暴騰した日産株、この軍需産業の花形日産の代表者、即ち三種の神器は久原房之助、かれが平沼、近衛、荒木の支援者だといわれる所以。⁽⁶⁾「要するに、日本精神の使徒達は、彼等の意圖の如何に拘らず、意識するとせざるにと拘らず、對內的には統制經濟の方向、資本主義修正・補強の方向に向つて、對外的には、三六年の危険線に向つて、拍車をかけるもの」。

五月。戰鬪的無神論者同盟書記長川内唯彦檢舉、同盟壊滅。六月。文部省思想局設置。十月。陸軍省新聞班「國防の本義とその強化の提唱」パンフレットを出し、「戦いは創造の力、文化の母である」と主張。⁽⁷⁾軍人の政治介入として問題化。十一月。勞働組合評議會結成。十二月。ワシントン海軍條約破棄をアメリカに通告。能動的的精神乃至行動的ヒューマニズム中心に、文藝懇話會發足。この年、「もんべの兄弟」(國分)、「手旗」(鈴木)など生活綴り方を中心とし、「青い空」(栗川)、「日向の家」(坂本)、機關紙「教育北日本」をもつ北日本國語教育連盟結成(翌年、北海道綴方教育連盟結成、兩者提

携)。日本プロレタリア作家同盟解體、轉向文學續出。横光「純粹小説論」を唱え「絞章」發表。田邊元、西田哲學を批判し「種の論理」樹立。神學者バルト、ヒットラーへの官吏宣誓に「福音に悖らざる限り」の留保をつけたこと等によりボン大學を逐われた。⁽⁸³⁾ 物理學者シュレーディングガー反ナチのためベルリン大學より追放。中國赤軍大西遷開始 N. Berdiaev : Das Schicksal des Menschen in unserer Zeit. ヴィットフォージェル「支那の經濟と社會」(邦譯)。河合樂治郎「ファシズム批判」(三八年發)。高田保馬「國家と階級」。西田「哲學の根本問題・續編」

一九三五(昭一〇)。「謹ンデ按ズルニ、天照皇太神皇孫瓊々杵尊ニ命シテ、此土ニ降りテ之ヲ治メ給フニ臨ミ、勅シテ曰ク、葦原千五百秋之瑞穂國……」これは衆議院議員江藤源九郎(陸軍少將)が、貴族院議員東大名教授美濃部達吉の天皇機關説を、不敬罪として、二月東京地檢に告發した冒頭の言葉。三月。頭山滿、菊地武夫(「學匪」とよんだ)、橋本徹馬、四王天退役陸軍中將(ユダヤ人排撃の中心人物。禪界にも四天王説流行)らが中心となり、機關説撲滅同盟結成。國體擁護連合會パンフレット「凶逆思想の掃討と國體の防護」。貴族院、政教刷新建議案可決。衆議院、國體明徹決議案可決。美濃部三著書發禁、同氏教壇を去る、自説を翻さず(翌年二月右翼壯漢に對たれ重傷)。

四月。文部省、國體明徹に關する訓令。青年學校全國に設置。五月。北支事變。八月。政府國體明徹聲明。統制派の永田鐵山軍務局長、皇道派の相澤三郎中佐に斬殺(相澤は臨時地で行したので、悪いとは思っていない)。中國共產黨「八・一宣言」、革命を中止、全力を抗日救國に注ぐと聲明。十月。イタリア、エチオピアに侵入。十二月。毛澤東、内戰を停止し、抗日救國のため民族統一戰線結成よびかけ聲明。教學刷新評議會設置、第一回總會、委員西田幾多郎、田邊元、國體明徹、祭政一致のワク内で學問の破壊をくいとめようと努力。⁽⁸⁴⁾ 武裝特別檢察隊綾部を急襲、大本教幹部百五十名檢舉、龜岡では出口日出磨ほか五六〇名檢舉(翌年王仁三郎以下六二名不敬罪にて起訴)。この年、保田與重郎、龜井勝一郎らによる「日本浪漫派」創刊、古典への回歸、日本民族精神の浪漫的復興によつて現代の頹廢を救おうとしたが、結果的には右翼勢力を支持。兒童の村機關誌「生活學校」創刊。北支事變に際し、中國佛教會、日本佛教徒に抗議聲明、これに對して明和會(佛敎者)「全支那佛敎徒に誨う」を送達、曰く「要するに、支那政權軍閥の徒の飽くなき貪慾の爲……又人類人道の公敵たる共產黨……を全支より驅逐し、眞に憐むべき民衆を救濟し、以て東亞永遠の平和を確立せむが爲……この已むに已むを得ざるの大悲折伏、一殺多生はこ

れ大乘佛敎の嚴肅に容認する所である……」

Jaspers: Vernunft u. Existenz. マチヤール「支那農業經濟論」(邦譯)。河合榮治郎「時局と自由主義」(三八年)。「唯物論全書」刊。戸坂潤「日本イデオロギー論」。和辻哲郎「風土」。西田「哲學論文集第一」。島崎「夜明け前」完成。石川「蒼氓」。

一九三六(昭一)。一月。ロンドン軍縮會議脱退。矢内原忠雄「眞理と戦争」(中央公論一月)、基督敎ヒューマニズムから反戰平和を主張。二月。二・二六事件、青年將校、齋藤内相、高橋蔵相、渡邊教育總監を殺し(岡田首相は秘書)、朝日新聞社襲撃。「謹んで惟るに、我が神州たる所以は萬世一神たる天皇陛下御統率の下に、舉國一體生成化育を遂げ、終に八紘一字を完了するの國體に存す……皇祖皇宗の神靈、冀くは照覽冥助を垂れ給わんことを。」(厥起經) 戒嚴令施行、その目的に曰く、「治安の維持、赤系分子等の盲動を防遏」。反亂軍は戒嚴司令官の「兵に告ぐ」諭告によつて全部歸順した。この諭告(相手の行動を誤りを言わず、ただ天皇の命に) (叛くと「逆賊」になるから歸順せよという)の作者大久保弘一少佐は、佛敎界と親しく、當時「各宗派の祖師は、何れも日本精神を開顯された偉人である、佛敎者は大いに各祖師の精神を發揮されたい」と語つたが、太平洋戦争の際、佛敎鞭撻の役割を果すことになつた。三月。メーデー禁止。五月、新興佛青同人百餘名檢舉、廿六名起

訴。九月。文部省訓令により、「國體、日本精神の本義に基づき」日本諸學振興委員會設置。十一月。日獨防共協定調印。ゲッペルス、藝術批評禁止令を發す。十二月。新興佛青、妹尾義郎檢舉。毛澤東「中國革命戦争の戰略問題」。拙文・對話「無の論理」は、戰時體制下の佛敎の便乘主義を批判、「心は萬境に隨つて轉ずじや。硝煙眞如を弄し、銃聲般若を談ず、須らく大乘的に……さしずめ自由も不可、統制も不可、中道こそ佛敎の本領といつた所から始めて、漸次趨勢に應じて善處する、これを無の論理という。何しろ大乘佛敎だ、ゆきづまる筈はない、把住でいかねば放行、放行でいかねば中道、中道で不足ならば不二、不二で足らねば圓融、圓融でなければ不即不離、差別即平等、平等即差別、物心一如、色即是空、五位、四法界、十住心、まことに受用不盡じや。」「最近ではドイツでも佛敎が勃興したというじやないか。」「そうだ、過日歸朝した帝國文化使節、淨土宗某師によると、あちらでも個人主義、自由主義が清算せられ、佛敎の無我主義に合流せんとしている、というんだからね。」「フアジズムの哲學がヘーゲル以來の全體主義であり日本でいう全體主義もこれの模倣——産業資本主義から金融資本主義への段階における、觀念的産物たる所以を、彼氏御存知ないとみえる。ユダヤ人追放、白色人種による有色人種の永久支配を高唱するナチスの綱領が、佛

教無我主義に合致すると云うんだから、愉快だ。 *neccis, mi tili, quantilla prudentia nundus regatur.* (わが子よ、汝は天下が如何に少量の思慮を以て治めらるるかを、知らざるなり。) (この年、中・朝連合抗日ゲリラ隊滿州に) (結成、幹部金日成四一年總司令となる)
 S. Schirach : Hitler-Jugend, Idee u. Gestalt. A. Gide : Retour de l'U. R. S. S. 「支那問題概論」(邦譯)。橋樸「支那社會研究」。永田廣志「唯物史觀講話」「日本精神史方法論」。矢内原忠雄「民族と平和」(三八年)。(發禁)

一九三七(昭一七)。一月。民政黨齋藤隆夫、軍の横暴を、政友會濱田國松、軍の政治介入を痛撃。新聞界寂として濱田らを支持せず。前年の朝日新聞社襲撃のショックが今後マス・コミを支配することになった。寺内陸相政黨の懲罰を主張し廣田内閣總辭職。二月。陸軍大將林銑十郎「祭政一致」内閣、敬神尊皇の大義を強調。國民黨・共產黨の提言をいれて抗日の國共合作を開始。財閥支援の下に國策研究會發足(矢次一夫、岸信介、大達茂雄、阿倍信行ら加建設十年)。四月。ひとのみち教組ら大檢舉、解散命令。六月。トハチエフスキー元帥外八名の赤軍巨頭肅清。七月。蘆溝橋事件、日中戦争。主謀者宗哲元軍事顧問茂川秀和少佐(佐)宮本百合子、窪川稻子らの作家、山田盛太郎、平野義太郎ら講座派檢舉。佐藤春夫、倉田百三、中河與一、林房雄ら「新日本文化の會」結成。九月。國民精神總動員實施要綱

決定。⁽⁴⁾十月。勞働總同盟、ストライキ絶滅を決議。日本諸學振興委員會、哲學公開講演會、高楠順次郎、全體主義は華嚴哲學と合致すると説く。⁽⁴⁾羅馬法王廳、極東の全カトリック教會にボルシェヴィズムの危険が現われた場合には至る所で日本の行動を無條件に支持せよと指令。十一月。日獨伊防共協定成立。「世界文化」の新村猛、中井正一、眞下信一、和田洋一ら、「リアル」の田中忠雄(のち轉向、り天皇主)ら檢舉。貴族院議員井田、東大の河合榮治郎、宮澤俊義、矢内原忠雄を赤だと攻撃、矢内原東大内の右翼教授の策動により追放。十二月。山川均、猪俣津南雄、大森義太郎、向坂逸郎、荒畑寒村、黒田壽男、鈴木茂三郎、加藤勘十ら四百名檢舉。新興佛青同盟解散。日本軍南京において大規模な暴行虐殺開始。⁽⁴⁾この年、牧師ニーマラー、ナチスにより投獄、八年間の強制收容所生活に入る。この年、中國佛教大學會理事長太虚法師、日本佛教徒及び軍民にあて、軍事行動停止、外交々渉を開くことを要請、これに對し日本佛聯本部、今日の事態は、中國民衆がソ連の煽惑をうけて、日本を敵視したことに由る。故に「法師大に悲心を興し、迷蒙の衆生を覺醒せしめ」られたし、という旨の回答を送る。

A. Gide : Retouches a mon Retour de l'U. R. S. S. 四四

「哲學論文集第二」「續思索と體驗」。天野貞祐「道理の感覺」(八三)年發。島木健作「生活の探求」。

國民精神總動員運動の出發に呼應して、佛敎活動も強化した。「國民精神總動員と敎化團體連盟」(拓植) (信秀) はいう、

「當局者の重大關心は、共產主義赤化思想の瀰漫に對する防禦としての、國體思想の陣營を強化するための…事變の有無に拘らず、國家國民を動員して、平常心是道の眞意義を完くすること…敎界の識者は疾くにこの問題を拈提して…神佛二敎の一致をいい、皇道精神と佛敎精神の合採をいい、天皇即佛格をいい、國家即淨土をいい、忠誠即成佛をいい、所論悉く蘭菊の美を鍾めた盛觀である。」「全支無安火宅の如し」(柳澤) (玄藤) はいう、「我が國が領土的野心なきことは、滿州國の王道樂土建設を見ても自ら判明する處である。然るに東洋の君子國を除外し、一も抗日、二も侮日…何たる非人道であつたか。…皇軍は到る處、無辜の人民を助け、飢えたるには食を與え、曲れるを直くし…暴戾に酬ゆるに恩愛を以てする…萬邦無比の皇道といわずして何であらうか。然るに彼等は頑迷不靈にして、ソ連の赤魔に魅了せられ、財臭紛々たる英に酩酊…之れ即ち阿片中毒より得たる排日病である。今にして醒むるなくんば、國亡びて山河ありのみである…皇軍は大なる犠牲を拂いつつ、各處に羊鹿牛の三車を設け、さあ、此れに乗つて東亞永遠の極

樂淨土に避難せしめようと、聲を大にして叫んで居るが…赤化に魅入られて…迷夢から覺むることなきははかなき國民といわねばならぬ。…相携えて…四億の民衆をして共に大白牛車に乗らしめたい故に…日本の支那と戦つてゐるのは…共產主義そのものであつて、現在兵火を交へつつあるのは、その前衛であつて、鏖殺の目的はその背後にある。」「大乘佛敎と日本精神」(關精) (拙) はいう、「天皇陛下に忠義を盡すことがそのまま大乘を修行すること…大乘は王法と一如…至道無難禪師は『ひたすらに身は死にはてて、生き残る、ものをほとけと名はつけにけり』と歌つておられますが、眞實自我を殺し切つた時、其處に顯現するものが、即ち佛性であり、眞實自己を捨て切つた時、其處に飛躍するものが、即ち日本精神であります…この赤魔こそ我が尊貴なる國體を攪亂せんとする…思想國難の叫ばれる所以…誠忠公に奉じ、和協心を一にし、て、内魔を撲滅し、外魔を掃蕩すべきである。』

「次の肉彈」(曉鳥) はいう、「わが日本精神は、皇祖皇宗の純一無雜の和魂でございます。その神靈は、佛敎と儒敎とによつて、磨きだされてきた。…各宗の本山や僧侶達に、とくにお奨めすることは、内地にいて少しの門徒取り合いに腐心しておるのを止めて、この戦亂の後の整理の出来ないうちに、どしどし彼の地へ移住するがよい。」拙文「道德の

「過剩」は、日本ファシズムによる道德の強制を批評、「今日ほど道德の高唱せられる時代を我々は知らない。政治も藝術も宗教も、我々の周囲の一切のものが、道德化せられんとしている。選舉權の行使を以て、權利の行使であると考えていた我々は、むしろそれが『國民の義務』であることを教えられた。かの民謡なるものは、民衆の間に期せずして流行し、愛誦せられるものだと考えていた我々は、最近『國民歌謡』なるものを下附せられ、これを歌うことが國民の義務であるかのように感ずるに至つた。かつて宗教の本質は道德を超越していると教えられた我々は、いまや一切の宗教が道德にかしづき、國民道德の補助機關として奉仕しつゝあることを目撃している。林前首相は『滅私奉公』の倫理の提唱者として有名であるが、この倫理は、かつてわが國固有の美風として、『廓』の存在の意味を、辯證法的に基礎づけられ、ここに最も美しき『つとめの倫理』を見出し、日本精神の眞髓ここに在り、と道破せられた某博士(紀平)の哲學と、相通するものを感じさせられる。：かようなツトメの倫理の權化として、尙我々の記憶に新しいものは、忠犬ハチ公である。諸子百家巷に滿ち、倫理道德獸類に及ぶ。何という倫理全盛の時代であるか。しかし日本精神の本質は、このようにつきつめたツトメの倫理に盡きるのであろうか。『あさみどりすみわたりたるお

ぞらの、ひろきをおのがころともがな」畏くも明治大帝の御製である。わが國民性のひとつとして寛恕性、包容性をあげられるのであるが、本居宣長も：まことに王道蕩々である。『道は自然に法る。其政察々たれば、其民缺々たり』と老子は書いている。」と結んだ。

右拙文掲載誌の明治天皇歌の上欄に、當時書きそえたと思われる「愈々處世的カモフラージュ始まる、慚汗」の鉛筆書きがあるが戦時體制への私の姿勢の第一段階に既に明らかのように、抵抗などというに値しないものは、ほぼこの年で區切られ、次の昭和十三年から論調が亂れてくる。

註(1) 「全被告は一九二八年一月一日より四五年九月二日に至るまでの期間に、中華民國に對し、侵略戰爭を計畫し準備せり。」

極東國際軍事裁判、起訴狀、訴因第六。「日本の軍國主義者達は、一九二〇年代の間にその權力を確立した。」R. Sherrill: A Concise History of The Pacific War.

(2) これが問題化、河本停職、滿鉄理事となる。彼は王道樂土計畫の主謀者。極東軍裁記録、毎日新聞昭和二一・七・六及び九日元關東軍參謀田中隆吉證言。

(3) 「大乘」昭四・九月號

(4) 「軍は大學總長の經營に干渉した。軍教に出席しないものは卒業させないと決めた。頭髮をのばしている學生には、軍教に出席させないと主張した。」極東軍裁、瀧川幸辰證言。「學生の頭髮を刈らせたの證言には、日本人を除いて滿廷失笑。米國辯護人は、頭髮を刈るとは何か。秘密結社のしるしか、と本氣で聞いた。」毎日、二一・六・二四

(5) 「晴眼」九月號、發行部數約四〇
中外日報、昭五・一・一及び同三・一一「如何に宗教を批判

- するか」
- (7) 橋本欣五郎中佐主宰、満州事變計畫グループの一つ。三月事件、十月事件のグループ。櫻會の活動については平凡社「日本史料集成」五七二頁以下参照。
- (8) 北 一輝「日本改造法案大綱」日本フアジズムの先驅典型として注目せられる。平凡社「日本史料集成」五七二頁参照
- (9) 「大乘」五月
- (10) 「中央佛教」十二月、今氏の大毎一月十二日、中佛十一月、特に後者「一徒弟の感想—マルクス主義者の立場から」を評したもの
- (11) 「大乘禪」六月
- (12) 「大乘」七月
- (13) 中濃教篤、壬生照順「信仰者の抵抗」三頁。新興佛青同盟に關する記述は、すべてこの書によつた。
- (14) 日本宗教史講座四、本間唯一、反宗教運動、七五頁。反宗運動に關する記述は、すべて本間論文による。
- (15) 「禪宗」七月。田中智學の活動については中濃教篤、宗教的民族主義の系譜（日本宗教史講座四）参照
- (16) 第六二五號、至急極秘、暗、林總領事、幣原外務大臣宛、「各方面の情報を綜合するに、軍に於ては滿鉄各線に亘り、一齊に積極的行動を開始せんとするの方針なるが如く、推察せらる。本官は在大連内田總領事を通じて、軍司令官の注意を喚起する様措置方努力中なるも、政府に於ても大至急軍の行動差止め方に付適當なる措置を執られんことを希望す。」第六六〇号、至急極秘、暗、林總領事「參謀本部建川部長は、十八日午後一時の列車にて當地に入込みたりとの報あり、軍側にては極秘に附し居るも、右は或は眞實なるやと思われ、また滿鉄木村理事の内報によれば、支那側に破壊せられたりと傳えらるる鉄道箇所修理の爲、滿鉄より線路工夫を派遣せるも、軍は現場に近寄せしめざる趣にて、今次の事件は全く軍部の計畫的行動に出で

- たるものと想像せらる。」日本史料集成、五六七頁。軍の陰謀については、極東軍裁、藤田勇證言参照、毎日、二一・六・一九。
- 敗戦後新憲法草案作製の際、幣原が戦争放棄條項を提案した心情が、戦時中の諸史料からわかるように思われる。
- (17) 毛澤東の結成した工農紅軍は一九二七年九月江西省寧岡縣の井岡山に最初の革命根據地を作つたが、二八年四月朱徳の軍隊が之に合流。これらの紅軍を中心に三〇年前半には江西、湖南湖北、廣東、福建、安徽、河南の各省にまたがる大小十五のソヴェトが成立、一二四縣を勢力範圍に收めた。三一年一月第一回中華ソヴェト全國代表大會、憲法、勞働法、土地法決定、中華ソヴェト共和國臨時中央政府樹立、首都を瑞金とした。このような前後の情勢の中で、満州事變が勃發したのである。日本共産黨は三・一五事件を「第一に、日本ブルジョアジーは中國革命の發展におびやかされ、中國とくに滿州、蒙古における日本帝國主義ブルジョアジーの權益がおびやかされるのを防衛するために、武力をもつて中國革命の發展に干渉する必要に當面している」（市川正一「日本共産黨闘争小史」）と評價しているが、これらの事情は、満州事變の受動的能動性を語るものといえよう。（補註(1)参照）
- (18) 「大乘禪」九月
- (19) 「日本宗教史講座」四、中濃教篤、宗教的民族主義の系譜、二五四頁
- (20) 「禪宗」二月
- (21) 「大乘禪」十一月
- (22) 日本史料集成、五八八頁
- (23) 田中清玄「共產主義から禪へ」大法輪一九六〇・二月號、轉向して山本玄峰老師の居士となる心理・論理經過が述べられてゐる。あとで検討したい。
- (24) 「現代佛教」一月、四月、六月
- (25) 中國人民に對する惡質な阿片政策については、極東軍裁證言

- 参照、毎日二・九・四及び五。この事実は清瀬辯護人も認め
ている、同上、毎日、二二・二・二五
- (26) 「現代佛教」二月
- (27) 高楠論文と共に「現代佛教」二月
- (28) 里見論文と共に「現代佛教」三月
- (29) 國家神道、神ながらの道と佛教とは矛盾せず、という第一前提に立つたとき、日本の佛教はすでに戦争協力への運命をみずから選びとつたのである。
- (30) 「現代佛教」一九三四年二月「戒藏院にて」
- (31) 五・一五事件公判、伊藤中尉「大川周明は一部陸軍々閥と提携して、三井、三菱を倒し、代りに久原財閥を擁立し、私腹を肥さんと企てた。」
- (32) 陸軍パンフレットに呼應して、社會大衆黨書記長 麻生久は「日本の國情において、資本主義打倒の社會改革において、軍隊と無産階級の合理的結合を必然ならしめている」と語り、西尾末廣議員は第六八議會において、「勞働組合はできるだけだけストライキを回避し、そのため涙をのんで賃金の値下げを忍び、三十人の首切りは二十人でくいとめて、幾多の苦痛を忍ばなければならぬ。」と演説した。「東洋經濟新報社」「太平洋戦争史」巻一、六七頁)
- (33) 瀧澤克己「カール・バルト研究」四七七頁以下に詳しい。
- (34) 三枝重雄「言論昭和史」八四頁以下
- (35) アウシュヴィッツその他におけるナチスのユダヤ人大量(五百萬)虐殺は、フランク「夜と霧」などに詳しいが、四天王説はこの世紀の犯罪に共同の責任をもつ。
- (36) 中島健蔵「昭和時代」一一〇頁以下。當時の西田の心境は「西田幾多郎全集」別巻六、書簡集に詳しい。
- (37) 「中央佛教」昭和二・一・一頁
- (38) 矢内原はキリスト教的ヒューマニズムの立場から、戦争は非眞理、平和こそ眞理だとして、軍事教練よりも平和教練が必要だと力説した。三七年「中央公論」に「國家の理想」を寄せ、主権・人民・領土の保全のみが國家の目的に非ずとし個人の言論の自由を強調して、軍部の怒りを買ひ、削除処分になり、著書「民族と平和」は三八年發禁
- (39) 日本史料集成、五七四頁
- (40) 「中央佛教」四月
- (41) 外務省聲明「：本協定に關連し、またはその背後に、何ら特殊協定のないことはもちろん、右以外の目的をもつて何ら特殊の國際的ブロックを形成：するものではない。なお本協定はソヴェト連邦、その他いかなる特定國をも目標とするものではない。(朝日、昭一・一一・二六日)この外務省聲明が全面的に虚偽であることが、敗戦後明らかになった「秘密附屬協定」によつて立證された。極東軍裁、法廷證四八〇號、日本史料集成、五八三頁
- (42) 「中央佛教」四月
- (43) この年(昭一一)刊、三木清編「現代哲學辭典」に、戸坂潤は日本フアッシュイズムと日本精神について、すぐれた分析をしている。
- (44) 「日本評論」三月「時局を語る」座談會において、社會大衆黨赤松克麿は、保守政黨を攻撃し、政界要人の暗殺を肯定して、濱田國松を激昂させ、一怒氣鋭く、満場緊張し來る、昂奮仲々収まらず」といつた場面を展開しているが、當時の社大黨の立場と、オールド・リベラリストの立場との對照を示すものとして興味がある。
- (45) 元關東軍參謀田中隆吉「裁かれる歴史」参照
- (46) この法案は軍を中心に立案されていたもので、國民の基本權帝國議會の權限をも有名無實化できるもの。この法案の可決について元老西園寺は、「右翼のことをどうこう言うが、要するに國民の知識が非常に低い。國民が低調すぎる：明治以來の教育の方針が悪かつた：明の亡びる時は丁度今の日本と同じで、

識者は澤山居つても、みんな黙つておつて、いかにも團結力がなく……と洩らした。(岡義武、最後の元老西園寺公望、文藝春秋、一九六〇・一月)

(47) 「佛教の全體性原理」、東京帝大佛青編「佛教思想講座」卷三所收

(48) 和田洋一「灰色のユーモア」参照

(49) 極東軍義記録、毎日、二一・七・三〇、八・三〇・三一

(50) 柳澤の文と共に「中央佛教」十一月

(51) 國民精神總動員の要請にこたえて夢窓疎石「夢中間答」をテキストに九月放送

(52) 中外日報、昭二一・一〇・一四

(53) 「禪宗」七月。この年ベルリン大學教授エドワード・シュプランガー來日、「日本評論」三月に「西洋文化の没落か復興か」を寄せ、國家の宗教性と日獨協力して新文化を創造すべきことを強調。

補註

(1) 東方會議が「對支政策要綱」を決定した二七年(米ではサッコ・ヴァンゼッティ事件)毛澤東(1893)江西省に最初の根據地樹立、翌二八年コミンテルン「中國問題に關する決議」中國がブルジョア民主主義革命の過程にあると規定、四月朱德(1896)毛の紅軍と合流。三〇年(滿州事變の前年)紅軍は十四軍團(六六六二〇人)から成り、主なる軍長は第一軍團(五五〇〇人)許繼慎(士官學校出身)、第二(五八八〇人)賀龍(農民)第四(八八八〇)朱德(ドイツ留學の舊將校)政治委員毛澤東(學生)第五(六八六〇)彭德懷(舊將校)。兵の出身階層は貧農五七・七二七%兵士(國民黨から轉入)二七・七二七%勞働者三・六三%流浪者等一〇・九〇九%最も充実した第四軍の裝備は小銃六五〇〇、大砲一六、機關銃一五六、拳銃八〇〇、迫撃砲一六。(三〇年「戦旗」七月號による)三七年國共合作成り、全紅軍を第八路軍として編入、三八年朱德これ

の總司令、規律の嚴正を以て鳴る。「三大規律八項注意」の歌に曰く、「革命の兵士は記憶せよ、三大規律と八つの注意。一つ、行動はみな指揮によれ。歩調が合わねばいくさに勝てぬ。二つ、大衆のものは塵一つとるな。大衆はわれらを擁護する。三つ、戦利品は届け出よ。人民の負担が軽くなる。三大規律をわれらは守れ。八つの注意を忘れるな。一つ、物の言いようはおだやかに。大衆をたつとべいばらずに。二つ、物の賣り買い公平に。無道なふるまいゆるされぬ。三つ、人の品物使つたら、その場で返せなくするな。四つ、人の品物こわしたら、ちやんと辨償おこたるな。五つ、人をなぐるな罵るな。軍閥のやり口まねするな。六つ、大衆の作物愛護せよ。行軍のとき作戦のとき。七つ、若い女をからかうな。ヤクザの癖を取り除け。(当時八路軍の兵は性的不具者ではないかと噂された)八つ、捕虜の兵士をいじめるな。なぐらすどならず物とるな。」陸軍省「戦陣訓」(四一年)に曰く「大日本は皇國なり。萬世一系の天皇上に在し、……皇恩萬民に遍く、聖徳八紘に光被す。……戦陣の將兵、宜しく我が國体の本義を体得し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國守護の重任を完遂せんことを期すべし。……」

(2) 河上肇三七七年「獄中贅語」脱稿、「宗教的眞理及び宗教について」の章は、自分は唯物論者だが宗教的眞理を認め宗教を信ぜずと云い、宗教的眞理が階級社會において民衆の阿片としての宗教に轉化することを、禪匠達の著述をひいて論証しようとした。